

訛語によるわざわい*

福島大学

田口孝之**

〔1〕 研究の動機

昭和28年3月福島大学学芸学部の入学試験で、国語科の問題に書取りに関するものが一題あつた。私の監督していた一室でキノウ(機能)と書くべきところを“知能”とした一受験生が目にとまつた。

東北地方には周知のように独特の方言が多い。語、アクセント、文法の面だけではない。音韻の面、すなわち“なまり”にも現われ、“イ”と“エ”との混同ないしはその中間化、“キ”と“チ”、“シ”と“ス”との混同はその代表的なものである。一定の文脈によつて意味に誤解をきたすおそれのない時にはともかく、書取りの試験にも影響するとなればわざわいといわざるをえない。故里のなまりをなつかしむではすまされない。

福島県では殊に前二者の混同が著しい*** ****。例えば、学校長名になる運動会招待状の文面にも「高天肥馬の絶好のスポーツシーズンを迎えました」とあるが珍らしいことではない。謹校小学校は会津若松市で有名な学校である。私は以前この学校を訪ね、路を土地の人に聞いて通ぜず、「チンチョウの学校は？」と発音して直答を得た経験がある。さきの受験生も会津の者かと思つて調べてそうでないことを知つて驚いた。このような動機から次の点を一応究明してみたい、これがこの研究の発端である。

〔2〕 目 的

I 入学試験の答案を利用して

- (1) 同種の誤りをした人々(これをAグループとよぶ)の出身地の分布。
- (2) Aグループは試験の及落に関係するか、いいか

* A Study concerning the Influences of Vocal Sounds.

** by Taguchi, Takayuki (Fukushima University)

*** 国立国語研究所報告2 言語生活の実態(白河市および附近の農村における). 1951, pp. 86~87.

**** 小林好日: 東北の方言. 1934, pp. 84~85.

えれば不合格者に多いかどうか。

II Aグループの所在地の小・中学校の児童・生徒の間で、このような混同が

- (1) 学年の進むに伴つてどう変化するか。
- (2) それらの一般的学業成績との関係。等をそれぞれ明らかにするにある。

〔3〕 調 査 I

1) 問題 入学試験の国語の問題は5題あつて、その5番目がここで問題となるものである。まず問題文をあげる。

単一の精神能力ではなく、(1)新しい材料をおぼえこむ働き、(2)一たんおぼえこんだ事柄を忘れないでいつまでも持つている働き、(3)後日になつてからそれをソ
(イ) ウキする働き、(4)これはたしかに過去に経験したことのある事柄だとサイニンする働き、この四つのキノウを予想するものである。またこれは、他の精神作用や(ニ) 行動から独立した別個の体験ではなくて、チカク、注意、想像、思考など、いずれもこの働きをナイホウして(ホ) おり、この助けをかりていないものはない。

上の文章は、ある辞書のある事項の説明である。問にこたえよ。

- (1) それは何の項か。()
- (2) カナの部分を漢字になおせ。

このようにキニチ混同の可能性が(1)をも含めた6個所のうち(1)(イ)(イ)(ニ)の4個所に及んでいる。それだけ当面の目的には頗る都合のよい問題なのである。

2) 受験生の分布 2日間の試験を実際に受験完了した受験生が1,449名(男1,115名、女334名)、その出身地は沖縄、九州から北海道にまたがっていた。地区をTable 1のように分けて、それぞれの所属人数を示す。うちAグループの者は計45名あつたが、その所在をもここに併記した。

表によれば、Aグループは会津だけに限ることなく、その他の地域にむしろより多く見うけられる。そこでこ

Table 1 受験生の分布

	関東以西	福島県			表東北		裏東北		北海道	計
		会津	中通り	浜通り	宮城	岩手	山形	秋田		
男	34	829			208		30		14	1115
		129	565	135	176	32	20	10		
女	3	286			41		4		0	334
		58	171	57	36	5	3	1		
Aグループ										
男		14			27		—			43
		4	10	—	25	2	—	—		
女		2			—		—			2
		1	1	—	—	—	—	—		

これらの地域を結ぶ関係が問題となる。東北地方の音声言語におけるキとチとの混同が口の開き方、舌の置き方などに起因することはすでに指摘されている*。ここでは、それが文字を書く時にも現われてわざわいとなり、漢字の書取試験には失点のもとになることを明示したいのである。そこでAグループの人々の混同の実例を見ることにしよう。

3) キとチとの混同の実例 混同による誤りは、問題となる4箇所(1)(イ)(ウ)(ニ)のすべてに亘って出ている。Table 2 にあきらかなように、例えば(イ)でAグループの13人が想知、総知など書き違えている。ところで(1)項に“記憶”と記入するのは他と異なり、単なる書取りではなく、全文から意味を総合的に把握して、これを書かねばならない。それだけ困難である。Table 2 でわかるようにこれの正答率が他より著しく低い。A

Table 2 問題別正答率と誤答例

正答率	(1)記憶	(イ)想起	(ウ)再認	(イ)機能	(ニ)知覚	(ホ)内包
総員 (1,449)	17.2	53.7	70.9	77.9	72.6	38.9
Aグループ (45人)	— (0)	28.9 (13)	57.8 (26)	18.9 ※(8.5)	51.1 (23)	28.9 (13)
Aグループにおける誤答例	知憶(3)	想知(4) 総知(2) 早知(1) 創知(1) 装置(5)		知能(36)	機覚(2) 規格(2) 基礎(1)	

備考：()内数字は実数を、※印は半解者のあったことを示す

* 小林好日：東北の方言。1934, p. 84

グループ45名のうち、一応出来たと思われる者が3名その悉くが“知憶”と書いて失点している。わざわいするところは極めて大きい。こうしたわざわいを被っている者のうち著しいのは(1)(イ)(ウ)(ニ)の4個中3個まで誤りをしており、それが1名、2個を誤つた者が10名、残りの34名は1個宛誤つて、混同による誤りの延べ数は57となつている。

4) Aグループの成績 ところで、この書取りの部分は長い文章の中の一部にすぎないのであるから、文脈をたどつていけばこうした誤りは十分防げるようにも思える。とすれば、Aグループの人々は総じて成績が良くないのではなからうかと考えられる。たしかにその通りである。合格者総数600名のうちAグループの者は僅かに9名、それも合格者順位100位までに1名、300台に1名、400台3名、500台4名、残り36名が不合格となつている。Aグループ外の者を一括してBグループとしグループごとに入学的の合否を調べてTable 3の分割表を得た。検定の結果($\chi^2_{0.01} < \chi^2_0 = 8.772$)なまりの有無は試験の合否にひびいていることが明らかである。なお国語の総点、学科試験(国・英・社・数・理)の総点及び進学適性検査の成績3者の間の相関係数を参考までに偏差積法によつて求めたのがTable 4である(相関図表は大体直線の関係に近い)。但し進学適性検査の成績と国語を除く他の科目の成績或いは国語の個々の問題の成績との相関は必ずしもあるといえる程のもではなかつた。国語の第5問(即ち書取り)との関係をあえて求めると $r = 0.434$ であつた。

Table 3 “なまり”の有無と入学試験の合否との関係を示す分割表

合否	Aグループ なまりあり	Bグループ なまりなし	合計
合格	9	591	600
不合格	36	813	849
計	45	1,404	1,449

Table 4 成績の相関係数

	国語	総合計点
進学適性検査	0.626	0.602
総合計点	0.792	

5) グループ成員の散布する地域的關係 すでに示したAグループの成員の出身地(Table 1)をその入学志願書によつて更に細別したのがTable 5である。地図の挿入を省くが福島市は県の北部に偏在している。

Aグループは会津にはじまり、中通り福島市の北部を飯坂から伊達郡の各地を通つて宮城県の殆んど全城を覆いそれが更に岩手県の中部にまで達する地域に点在している。この地域はかつての伊達藩の版図にほぼ一致している。会津も一時伊達政宗に占有されていたことがあるのでこうした共通点があるのかもしれない。

ここに注目すべきは、Aグループが福島県中通りの北部から南奥太平洋側のみ散在して、日本海側の山形・秋田両県には及んでいないということである。同じく南奥といつてもこのように差異のあることは小林氏の所説*に一致している。しかし秋田県出身の友人で「君!」といつて相手を呼ぶ時の発音が“チミ”としかきこえないのがおつた。そこでキ→チ混同の有無について岩手大学と秋田県教育委員会勤務の友人に照会してみた。岩手からは、この混同はほぼ全県下に及んでいるようである、との返信を得たが、秋田からは「そのようなことは全くない」との意の応答を得た。たまたま私の住居近くに最近秋田から福島へ転じた一家がある。尋ねてみると、母

親の方はこの混同に気付かぬ様子であつたが、子女の方は学校でそのことを注意されたという話であつた。そこで考えられることは、(1)発音上の混同は必ずしも文字を書く場合に迄ひびくものではないこと、(2)混同に対する意識は他人からの指摘によつて初めて生じる、ということである。秋田からの解答は(1)を指して言つてよこしたのかもしれない。

発音の上では同じ混同をせざるをえない地域にある人々でも、意識の面でそれが明瞭に分化しているならば文字表記の際にははつきりと差をつける筈である。だから、なまりの影響が書取りの試験の際にもそのままの形で出て来ているのは、そうした分化の進度の低いことを物語るものであろう。総合成績にひびいてくるのはいうまでもない。

〔4〕 調査 II 小・中学校の児童生徒に見られる“なまり”の化変

1) 問題 キ→チの混同がAグループの属する地域での児童・生徒の間はどう消長するか、又混同に対する意識の程度が学業成績に関係するならば、この地域でのAグループからの脱却は、学年の進むに従い、又同じ学年では成績の上位の者からみえてくる筈である。

このことをたしかめるために私は会津で若松と喜多方との中間にある坂下町ばんげの小・中学校に託して、次の12問30字の漢字にふりがなをつけさせた。問題は

- (1) 急行列車 (2) 鉄橋を渡る (3) 郵便局 (5) 学級新聞 (6) 教育 (7) 研究 (9) 機械 (10) 気候 (11) 競争 (4) 直線 (8) 調子 (12) 胃腸

12問中はじめの9問はキ→チ混同の可能性を、後の3問はチ→キ混同の可能性をもつものである。これらを番号順に並ぶように印刷して、小学5年生から中学3年生までに配布し、各組担任教師の指示に従い、昭和28年6月中旬に一斉にふりがなをつけさせてもらった。所要時間は教示の時間を除いて3分。検査終了後、担任教師が平素総合的に見ている学業成績によつて上・中・下の三集団に組毎に分類することを依頼した。比較のためこれと全く同じ検査を福島市立第四小・中学校でも行つた。

2) 検査の結果 結果はTable 6に示す通りである。

まず誤りの全くなかつたもの(表その1)について見ると、当然のことながら、正解者の員数は学年の進むに従い両校男女とも概して増加している。細かにみれば多少の出入りはあるけれども、両校における漢字の読みの力に決定的な差異があるとはいえないように思われる。

Table 5 Aグループの成員の出身地一覽

県	市	町	村	人数	計
岩手			胆沢	1	2
			一の関	1	
宮城			気仙沼	1	27 (7)
			古川	1	
			石巻	1	
			仙台	3	
			柴田	10 (4)	
			刈田	4 (1)	
			白石	3 (1)	
福島	中通り	伊達郡	藤田	2 (1)	14 (2) ※2
			半田	1	
			大田	1	
			森江野	2	
			五十沢	1	
			陸合	1	
			伏黒	1	
会津			飯坂	1※	3 (1) 2 ※1
			若松	3 (1)	
			喜多方	2 ※1	

() 内数字は合格者のうち数
※印は女子を示す

** 小 本 友 正 : 東北の方言, 1934, p. 57

Table 6 (その1) 無誤答者数比較

学 年	男				女				
	会津坂下校		福島第四校		会津坂下校		福島第四校		
	実数	%	実数	%	実数	%	実数	%	
小学校	5	0/23	—	1/30	3.3	0/22	—	1/26	3.9
	6	3/21	14.3	4/23	17.4	2/22	9.5	6/30	20.0
中学校	1	8/22	36.4	15/30	50.0	8/24	33.3	17/24	70.8
	2	16/30	53.3	16/29	55.2	10/25	40.0	10/24	41.7
	3	12/27	44.4	14/29	48.3	12/23	52.2	11/27	40.7

備考 3/21とあるのは21名の受検者のうち誤りのない者が3名あつたことを示す

(その2) “なまり”による誤りをしたものの分類

坂下校 学 年	男				女				
	上	中	下	計	上	中	下	計	
小学校	5	5/6	6/9	5/8	16/23	1/4	10/10	3/8	14/22
	6	1/7	6/9	2/5	9/11	2/6	6/9	3/7	11/22
中学校	1	2/5	6/10	4/7	12/22	2/6	7/11	5/7	14/24
	2	2/5	2/12	4/8	8/30	0/6	8/15	3/4	11/25
	3	2/10	7/11	6/6	15/27	0/8	4/7	5/8	9/23

- 備考 1. 福島市第四小・中学校にはキ⇄チ混同の誤りは男女とも1名もなかつた。
 2. 表中5/6とあるのはその部の受検者6名中この種のなまりによる誤りをした者が5名あつたことを示す。

まして“なまり”によるキ⇄チの混同は会津にのみ現われ、福島市には全く出ていないのであるから、いよいよ決定的な言を慎しまらざるを得ない。しかし、なまりによるこの種の混同については会津北部と福島市の差の有意性を断定してよい。そこで次に会津における混同の推移に目をうつすことにする。

表その2によれば、

- (1) なまりによるキ⇄チの混同は学年を追って減少する。その減少は総合成績上位の者からはじまる。
- (2) 小学校時代には、ことに男子にあつては成績上位の者にもまだかなりの混同が見えるけれども、6年生になると極限かとも思われる程度にまで減少してくる。成績中位以下の者の減少は中学校入学後に起るようである。
- (3) 女子は男子に比して一般に早くから減少の傾向が現われているようである。
- (4) 検査に用いた12個の問題には発音上混同を起しうる文字が一字ずつ入っている。このうち混同による誤りを1人もしなかつたものは機の一文字、1人(男子)

だけ誤つたものが氣、次いで誤りの比較的少いのが橋であつた。反対に混同の著しいのは急、局、究、直、調であつた。これらは読めていながら“なまり”にわざわいされて誤つているものである。従つて小学5年生から中学3年生に至るまで平均的に誤りが出ていた。ところが読みで困難なのが腸の字であつた。だから初めは同じく失点であつても、ふりがなが付いていないのであるから、混同による誤りには数えられない。従つて小学6年生以後、誤り数の仲間に入ってくるわけである。

(5) キ→チの混同もチ→キの混同もともに現われている。どちらの混同がより多く現われているか。条件が必ずしも同一ではないから、もともと比較は困難であるけれども、仮りにその比率の平均をとつてみると、男子においては8:17、女子にあつては

9.4:17でチ→キの混同の方が多きようであつた。

3) イとエとの混同 a これまではキ⇄チの混同を主として論じてきた。今の検査の問題にはこの他イ→エの混同をなしうる個所が含まれている。育と胃とがそれである。この種の混同は現にここにも現われていた。即ち会津坂下の学校では、まず男子に6年生で4名、中学1年生3名、2年2名、3年1名の合計10名。女子は6年1名であつた。この混同は福島にもあつて、中学1年生に1名、2年3名、3年2名で計6名、すべて男子であつた。この点でも女子に混同例が少い。

もつともイ⇄エの混同はひとり東北に限らず、東京付近、ことに千葉、埼玉辺りでも耳に入るものである。事実この混同は常にとがむべきものとはいえない。“威張っている”といつても“エバっている”といつてもどちらも許されている。それはともあれ東北地方のそれはひどい。福島県のものも独得である*。そのことについて、ここで少しくふれてみたいと思う。

* 国立国語研究所：前掲書 pp 131~166

b 日本教育大学協会の通信教育を私どもの大学でも実施しているが、その課題に対するレポートは殆んど全県下から送られてくる。私の担当する科目児童心理で昭和28年7月に受理したレポートの総数は109通(男教師47名, 女教師62名), そのうちにイとエとの混同を一個所以上していた者が12通(男5, 女7)あった。総数の約10%に当たっている。混同の延べ数16, イ→エの混同をしたものが2名, 他の10名はエ→イの混同であった。

これらの混同は, 受講生の(1)年令(男20才~46才; Me=26:10, 女20才~44才; Me=23:6)(2)資格(2級, 仮, 繰免)(3)性のいかにまず関係ないように見えた。

昭和28年12月に担当した教育評価のレポート総数は101通(男教師のみ30才~53才; 平均年令43.1才)。そこで混同を見せた13名のうちイ→エの混同が2名で, 他の11名はエ→イであった。ここでも前例とほぼ同じような模様が観察されている。

c 昭和29年初夏から夏期休暇にかけて行なわれたいわゆる認定講習に際して, 私の課したレポートに材料をひろってTable 7に示す結果を得た。

ここにある三つの講習会場のうち一箕村は会津若松市に隣接する農村であり, 保原町は先の調査Iで触れた県北伊達郡の中心地にある町である。従つて, ともにキヲチ混同の現われる可能性が十分に予想される。又第三の原町市は浜通りの最北にあつて宮城県に境する相馬郡の中心都市である。このような3ヶ所に私の今度の講習会場があげられていたことは全く偶然のめぐりあわせにすぎないのであつたが, 私の調査のためには誠に好都合であつた。もつとも各会場ともその地の教員だけが集まつたわけではなく, その既得単位の関係などからかなり遠方からの参加者もあつた。そこでこの人々の出身校を調

べてみたが, やはり大部分はそれぞれの近くの者であり, 且つ又下に述べる理由によつてここには細かい分布の状態を記すことを省いた。とりわけ一箕村での講習はいわゆる助教諭講習という関係もあつて, その殆んど全員が会津出身者であつたといつてよい。

これらの会場で, なまりによる混同はイ⇒エだけに見えてキヲチには全くなかつた。これが受講生の分布の記載を省略した理由である。Table 7について見ると,

(1) 同じくイ⇒エの混同といつても, イ→エの混同よりも概してエ→イの混同例が多い。同じ人でこの二つの混同を示している者もある。この二種の混同は個人にみられる特殊な型ではなく, 福島県では概してエ→イとなる傾向が多くみられる, といつたらよいのではあるまいか。

(2) b項にあげた教育評価はいわば校長コースのための科目のため年輩の者が多く, 同じ項の児童心理とc項の保原町及び原町市のは級・年令ともに広い範囲にまたがっており, 一箕村のは助教諭のための講習であつた。このような5者それぞれの特色のあるに拘らずイ⇒エの混同にはほぼ一致した傾向がみえていた。これによつて見ればイ⇒エの混同は広く福島県の殆んど全体に亘つて強く現われる特色であり, 年令, 級, 性などの差にはまず関係ないといつてよいのであろう。

(3) この混同はどんな場合にも常に現われるわけではもとよりない。以上の調査によれば, 少くとも書記の上に見えたイ→エの混同は大部分“聞いて”に集中しており, その他“用いる”, “取扱い”に少しく見えていたにすぎない。次にエ→イ混同の主なるものは, “考(思, 憶, 言, 与, 教)える”の動詞と他に“選ぶ”“例え”などである。

(4) キヲチの混同はここには全く見受けられなかつた。これらの音の入る言葉は恐らく漢字の中に吸収されてしまつて表面に出なかつたのであろう。

それ故キヲチの混同を見るためには(1)発音をなまで聴き取る方法をとるか, 或いは(2)ことさらに仮名書きさせてみるのがよいであろう。この研究は(1)の方法によるのではなく, 書字の上に見られる面からする試みであり, これ迄の方法は順逆の差こそあれ悉く(2)の

Table 7 受講生のレポートに現われた混同の割合

会場地	性別	受講者総数		そのうちの混同をした者の数					
		人員	年令(才) RangeとMe	人員 ^①	年令(才) RangeとMe	イ→エ ^②	エ→イ ^③	イ→エ	エ→イ
一箕村 (会津)	男	53	19~51, 24:6	9	19~51, 23:5	3	8		
	女	42	19~40, 23:7	1	24	0	1		
保原町 (中通り)	男	61	20~40, 23:10	8	21~30, 23:6	3	6		
	女	57	19~48, 23:11	5	22~29, 23:9	1	5		
原町市 (浜通り)	男	32	19~47, 29:7	3	22~31, 24:0	1	3		
	女	56	19~45, 26:1	5	25~42, 26:6	3	2		

備考 ①欄に数えた者の中にはイ→エの混同とともにエ→イの混同をした者もある。それ故 ②+③>① となつていところもある。

方法によつてきたのである。

そこで、これに類した残る方法として、ある文章を読んでもかかせ、それを児童・生徒にすべて仮名書きさせる方法を次ぎに試みたいと思う。ここに記したB項及びC項は実はそのための準備作業でもあつたのである。

〔5〕 調査Ⅲ 聴き取り

書取りの調査で誤る場合にもいろいろある。一点一劃の書き損ねによるもの、意味の把握ができないであるもの、或いは又正しい文字を憶い出せないまま苦しみに当て字で間に合わせて誤ることなどいろいろある。しかしそんな時にもキヅチの混同による誤りをするのはまずあるまい。混同は二つの音が感覚的に意識の上でか、ともかく未分化なところから生じる。それを発音の上の地域的特色としてのなまりによるわざわいと見てきたのである。調査Ⅱで試みた漢字の読みは、受検者ももしその文字をまだ学習していないとなれば実は何とも致し方がない。前に記したように腸の字にそのへんりんが見えていた。

その点聴き取りによる検査はそうした不利を除くことができる。音表文字としての仮名で他人の言うまを表現せよからである。私は最後にこの方法によつてキヅチの混同とイヅエの混同を検べ、これまでのものの一種の追試ともする計画を立てた。そこでこれまでの調査で得た資料を基にして次の文を作製した。

- (1) 君ちゃんが犬にえさを与えます。
- (2) 級長とか学級委員とかにはどんな人をえらびますか。
- (3) 先生のいうことをよく聞いています。
- (4) 柿の木の枝を用いました。
- (5) 郵便局へ行つて機械の調子を調べてきます。
- (6) 急行列車が鉄橋を渡つて行きます。
- (7) わたくしは絶えずそのことを考えています。

2) 検査の実施 ところで感覚的弁別力の最大発達期は男女とも大体6才から9才までであり、10才ではほぼ成人なみに達する*。だから音の弁別に対する訓練もこの時期が最も大切であり、小学校修了までには一応固定してしまうものとみてよいであろう。このような見地から今回の聴き取り検査の対象を小学生に限り、その2年から6年までとした。殊に2年生には全体を縮めて単語の形で与えてみたが、書記にかなり抵抗を感じる様子が見えたので整理に際してはこれを省き、3年生以上のものを比較した。

問題文の読みは学級ごとにすべて私が直接当つた。生

* 文部省：教育心理（下）1947, pp 227~229

後はじめの約30年間東京に生活してきた者による読み方に条件をととのえたのである。一回の調査に要した時間は教示の時間を除いて大体12分、15分までを限度に実情に即して多少伸縮し、時間の不足によつて書けなかつた、ということのないようにした。対象とした学校は福島県北の次の四校である。

- A 信夫郡大庭村庭塚小学校（福島市より西方に10キロ、会津寄りの学校——純農村校）
- B 福島市渡利小学校（新市域地区の学校）
- C 伊達郡保原町小学校（郡の中心地校）
- D 伊達郡国見町小坂小学校（宮城県との県境近くにある学校の一つ——純農村校）

これまでの調査によつて予測されることは、後2校にはキヅチの混同が多く現われ、前2校はそうでないいわば統制群の役割をなす学校である。期日は昭和29年9月中旬のうちに実施した。

3) 結果 Table 8 (A~D)は検査の結果の学校別集計表である。上・中・下の段階別の方式は調査Ⅱにおけると同じである。これを混同の全くない者、イヅエの混同だけの者、キヅチの混同だけの者及びこの両混同を共にした者の四種に分ける。なお“その他”の項には脱字や判読困難の度の著しいものを数え、その混同の大体の傾向を付記するだけに止めて集計からは一応省いて扱つておいた。

(1) キヅチの混同はC、Dの両校には頗る濃厚に現われ殆んど絶対的といつてよい。さきのAグループ地域の特色がここにそのまま出ている。その度合はC校におけるよりも、更に宮城県に近いD校に強い。これに対しこの地域外にある二校のうちA校に至つては皆無である。

(2) この混同が学年の進むにつれ、又同じ学年では成績の上位の者程早く、女子に男子よりも早く減少する傾向のあることがここにもほほ明きらかにされている。なお、表では混同による誤りの数が1ケの者も10ケの者も同じく1ケとして数えてあるが、成績「上」の段階に属する者はそうした誤りの数もまた少いのである。

(3) 混同の著しい者にあつては、およそキもしくはチの音が語のどんな位置に、又どんな続き具合でおかれてあるかと誤つている。例えば「柿の木の枝を用いました」は「かちのちのいだをもきえました」となる。この場合もちいのいが脱けて「もちました」又は「もきました」となつている例も相等数あつた。

(4) 問題のうちキヅチ混同の著しいものは級長と調子であつた。この場合、拗音の形にすべきことのできないは問題外として扱つた。集計はすべて音の混同

Table 8 聴き取り検査における混同の傾向

A 信夫郡庭塚小学校

混同の種類	性	の類	男					女					
			(人員)	なし	イロエ	キコチ	両者共	その他	(人員)	なし	イロエ	キコチ	両者共
3年	上	5	1 20.0	5 80.0				7	1 14.3	6 85.7			
	中	7	0	7 100.0				8	2 25.0	5 62.5		1 12.5	
	下	6	1 16.7	5 83.3			1(→イ)	7	1 14.3	5 71.4		1 14.3	
	計	18	2 11.1	16 88.9			1	22	4 18.2	16 72.7		2 9.1	
4年	上	4	1 25.0	3 75.0				5	0	5 100.0			
	中	8	1 12.5	7 87.5				10	3 30.0	7 70.0			
	下	7		7 100.0				5		5 100.0			
	計	19	2 10.5	17 89.5				20	3 15.0	17 85.0			
5年	上	9	1 11.1	8 88.9				9	2 22.2	7 77.8			
	中	16	1 6.2	14 87.6	1 6.2			16		16 100.0			
	下	8		6 75.0	2 25.0		1(→イ)	7		7 100.0			1
	計	33	2 6.1	28 85.8	3 9.1		1	32	2 6.3	30 93.7			1
6年	上	8		8 100.0				5		5 100.0			
	中	18		18 100.0			1(→イ)	9	2 22.2	7 77.8			
	下	4		3 75.0		1 25.0	3	4		3 75.0		1 25.0	
	計	30		29 96.7		1 3.3	4	18	2 11.1	15 83.3		1 5.6	

備考 1. 行の中に2段になっている数字は上段が実人員を、下段がその各級ごとの%を表わす。
 2. “その他”の列にある数字は文字不明の者の数。すべて合計及び%からはぶいた、(→イ)とあるはエ→イの傾向がどうやら見えたの意。

B 福島市渡利小学校

混同の種類	性	の類	男					女					
			(人員)	なし	イロエ	キコチ	両者共	その他	(人員)	なし	イロエ	キコチ	両者共
3年	上	6	3 50.0	3 50.0				5	1 20.0	4 80.0			
	中	9	4 44.5	5 55.5				11	1 9.1	10 90.9			
	下	6	0	6 100.0			1(→イ)	6	0	6 100.0			1(→イ)
	計	21	7 33.3	14 66.7			1	22	2 9.1	20 90.9			1
4年	上	6	3 50.0	3 50.0				5	4 80.0	1 20.0			
	中	12	4 33.3	8 66.7				7	3 43.0	4 57.0			
	下	2	0	2 100.0				4	1 25.0	3 75.0			
	計	20	7 35.0	13 65.0				16	8 50.0	8 50.0			

田口：訛語によるわざわい

5 年	上	6	2 33.3	4 66.7			7	4 57.0	3 43.0
	中	9	0	9 100.0			11	4 36.4	7 63.6
	下	5	0	5 100.0		2	4	1 25.0	3 75.0
	計	20	2 10.0	18 90.0		2	22	9 40.9	13 59.1
6 年	上	9	6 66.7	3 33.3			7	5 71.4	2 28.6
	中	7	3 43.0	4 57.0			11	4 36.4	7 63.6
	下	3	0	3 100.0		1(→イ)	3	0	3 100.0
	計	19	9 47.4	10 52.6		1	21	9 43.0	12 57.0

C 伊達郡保原小学校

混同の 種類	性 の類	男					女					
		(人員)	なし	イニエ	キニチ	両者共	その他	(人員)	なし	イニエ	キニチ	両者共
3 年	上	12	3 25.0	8 66.7		1 8.3		14	9 64.3	5 35.7		
	中	25	4 16.0	12 48.0		9 36.0		19	5 26.3	9 47.4	5 26.3	
	下	8		3 37.6		5 62.4	2	10	1 10.0	3 30.0	6 60.0	
	計	45	7 15.6	23 51.1		15 33.3	2	43	15 34.9	17 39.5	11 25.6	
4 年	上	13	8 61.5	4 30.8		1 7.7		16	11 68.8	5 31.2		
	中	20	2 10.0	13 65.0		5 25.0		22	9 40.9	11 50.0		2 9.1
	下	13		1 7.7		12 92.3		8	4 50.0	1 12.5		3 37.5
	計	46	10 21.8	18 39.1		18 39.1		46	24 52.1	17 37.0		5 10.9
5 年	上	13	8 61.5	5 38.5				16	13 81.4	3 18.6		
	中	19	5 26.3	10 52.6	1 5.3	3 15.8		18	9 50.0	6 33.3		3 16.7
	下	15	1 6.7	6 40.0		8 53.7	1(→イ)	7		4 57.0		3 43.0
	計	47	14 29.8	21 44.7	1 2.1	11 23.4	1	41	22 53.6	13 31.7		6 14.7
6 年	上	12	9 75.0	1 8.4		2 16.6		19	15 79.0	4 21.0		
	中	17	1 5.9	10 58.9		6 35.2		18	9 50.0	9 50.0		
	下	17		7 41.2		10 58.8	2(→イ)	11	2 18.2	5 45.4		4 36.4
	計	46	10 21.8	18 39.1		18 39.1	2	48	26 54.2	18 37.5		4 8.3

D 伊達郡小坂小学校

混同の 種類	性 の類	男					女					
		(人員)	なし	イニエ	キニチ	両者共	その他	(人員)	なし	イニエ	キニチ	両者共
3 年	上	4	1 25.0	1 25.0		2 50.0		4	3 75.0	1 25.0		
	中	7		1 14.3		6 85.7		4				4 100.0
	下	4				4 100.0	1(→キ)	3				3 100.0
計	15	1 6.7	2 13.3		12 80.0	1	11	3 27.3	1 9.1		7 63.6	

4年	上	7		3 43.0		4 57.0		8	3 37.5	1 12.5	4 50.0
	中	10	1 10.0			9 90.0		11	1 9.1		10 90.9
	下	6		2 33.3		4 66.7	3 { →イ1 →キ1	4		1 25.0	3 75.0
	計	23	1 4.4	5 21.7		17 73.9	3	23	4 17.4	2 8.7	17 73.9
5年	上	9		3 33.3		6 66.7		14	7 50.0	3 21.4	2 14.3
	中	10				10 100.0		14	1 7.1	4 28.5	1 7.1
	下	11				11 100.0	1	13		3 23.0	10 77.0
	計	30		3 10.0		27 90.0	1	41	8 20.0	10 24.4	3 7.3
6年	上	8	1 11.5	3 37.5	1 11.5	3 37.5		10	5 50.0	5 50.0	
	中	10	1 10.0			9 90.0		16	4 25.0	6 37.5	6 37.5
	下	12		1 8.3	1 8.3	10 83.4		8		3 37.5	5 62.5
	計	30	2 6.7	4 13.3	2 6.7	22 73.3		34	9 26.6	13 41.1	11 32.3

という点からのみまとめたものである。

(5) イ⇒エの混同は四校に共通して数多く出ている。Aグループの地域のC校(保原町)に却つて少い位であった。かくして、イ⇒エ混同とキ⇒チ混同とは類を異にし平行するものではないといつてよからう。

(6) イ⇒エの混同は福島県の各地に広く現われ、小学校在学中は高学年になつてもまだかなり高率のままで残っている。

(7) イ⇒エの混同の多く見えるものは“えき”“与(考)える”“用いる”“絶えず”であった。殊に後の二者は子供の普通使わない言葉であろう。音をたよりに表記するだけのものにも混同がこのように高率に現われるとなれば、これらの混同が感覚的もしくは意識の上における未分化によると考えるより他はないであろう。

Table 9 非農家児童の混同分類表

性	無混同	イ⇒エ	キ⇒チ	両混同	(a)	(b)	a÷b×100
					計	全校	
男	0	5 45.6	0	6 54.4	11 100.0	101	10.9
女	3 30.0	3 30.0	1 10.0	3 30.0	10 100.0	109	9.2

※ Table 8のDにある計にさらに“その他”の数を加えた数である。

(8) この種の混同は小学校の児童に関する限り家庭の職業には余り関係しないようである。例をDの小学校にとつて全校の非農家児童だけについて見た分類表からもほぼこのことが推察できると思う。

〔6〕 結 語

この研究の結論はすでに前項に記した(1)~(8)で尽きている。ここには本論に関する方面の指導についての私の意見を述べて結びとしたい。

発音上の混同が、いつもそのまま、文字を書く場合に現われるわけではない。しかし、音の混同が文字の上にも現われるのは、大体感覚的もしくは意識の上の未分化な情態に由来するものと思われる。とすれば、これが矯正には良い指示・注意・比較などによつて聴き取りや発音の上の弁別を十分にすることが重要事となる。それには小学校期間中が最適期であり、且、これが指導の任にある教師がこのことをよくなしうるものでありたいと思う。そして子供が言語の面からわざわざをうけ、人前で口もきけないというような*つまりぬ弱みから守つてやりたいものだと考える。

* 柳田国男：国語の将来，創元文庫 p. 247 及び p. 268.

not decrease the learning result of social studies, but increased the social skills.

(d) The child-centered group method had the advantage over the teacher-centered method for the upper intelligence children, and the disadvantage for the lower intelligence ones.

(e) The child-centered group method increased the positive, independent and co-operative attitudes

of children, but the teacher-centered method increased their negative, heteronomous and dis-cooperative attitudes.

(f) The child-centered group method aroused the learning motivation of children more than teacher-centered method. And this tendency was transferred to the learning of the other school subjects.

A STUDY CONCERNING THE INFLUENCES OF VOCAL SOUNDS.

By Taguchi, Takayuki

Fukushima University

In Tohoku Districts of Japan, there are many kinds of dialects. Especially the confusions of vocal sounds, for example, between "ki" and "chi", or "e" and "i", are well known.

Among 1449 applicants for admission into Teachers' College (Fukushima Univ.) 45 persons caused the abovesaid confusions ("ki" \rightleftharpoons "chi") in the dictation tests last year (1954). They wrote KIKAKU for CHIKAKU. Here we want to divide these applicants into 2 groups, the Corrupted Group and the Normal Group. The success or failure for admission were determined by their synthetic results of tests and some other means. 600 were admitted into the College, only 9 included among them from the Corrupted Group. Thus we have the following contingency table.

A COMPARISON OF THE APPLICANTS OF CORRUPTED AND NORMAL AS REGARDS THE RESULTS OF EXAMINATION.

RESULTS	CORRUPTION	NORMAL	TOTAL
SUCCESS	9	591	600
FAILURE	36	813	849
TOTAL	45	1404	1449

From this table we have $\chi_0^2 = 8.772$ as the value of χ^2 ($\chi_{0.01}^2 < \chi_0^2$). So we must reject the Hypothesis that their success and failure do not depend upon their corruption or normality. Then it is very clear that the dialect or corruption handicapped them.

As to the members of Corrupted Group, they are only from particular regions—AIZU district and the northern part of Fukushima Prefecture, almost all parts of Miyagi Pref. and the southern half of Iwate Pref., but none from other districts. These regions coincide nearly to the dominion of the feudal Lord of Date.

Referring to these results, I gave a Hearing Test this autumn to pupils of 2 schools in (♂293, ♀287) and 2 schools out (♂190, ♀176) of these regions.

The latter are so to say as the control groups.
Conclusion :

1) The confusion "ki" \rightleftharpoons "chi" was only in Corrupted Group, and not, at all, in other regions.

2) This confusion disappears gradually as classes ascent, and faster in the pupils of higher marks in the same class. In those of lower marks such a

confusion is not always diminished. (Thus I guess the confusion perhaps depends upon the sensory or conscious status of not yet differentiated.)

3) This confusion tends to disappear faster in female than in male pupils.

AN ANALYSIS OF SPEECH-READING TEST SCORES

By Sato, Shoichi

Tohoku University

The problems involved in testing speech-reading ability are studied here from two aspects; first, from that of logical validity of some test procedures, second, from that of applicability of analytical methods to the following two tests. One of these two tests (test A) uses a list of 20 nonsense monosyllables, the other (test B) a list of mutually unrelated 30 words as speech material. The purpose of test B consisting of three sub-tests is to evaluate the effect of word-association upon speech-reading.

Subtest 1: For example, a group of subjects (55 lower secondary deaf school pupils) receives a speech word "ito (thread)", after having been shown a written stimulus word "hari (needle)". The speech intelligibility of the word "thread" is counted, and represented by the symbol "b (thread-needle)". Similarly "b (water-ice)" etc. are derived.

Subtest 2: The control group (n=54) receives only speech words such as "thread", "water" etc. The speech intelligibility of each word is represented as "c (thread)", "c (water)." etc.

Subtest 3: Each subject is made to give an association-response to the word "needle". The symbol "a (thread-needle)" represents the percent of "thread" responses to "needle". Similarly, "a (water-ice)" etc. are derived.

results: (see Table 5, 6.) (a, b, c, in two Tables are above-stated symbols.)

Judging from these Tables, the correlation between "a" and "b-c" is doubtful. It is frequently observed that the interacting process of the information obtained by two different processes, i. e. by the anticipation of succeeding words, and by the visual perception of oral movement, is not a linear function of these two processes.

A STUDY ON THE PROGNOSSES OF SOCIAL ADJUSTMENT OF THE DELINQUENT JUVENILES (I)

By Mizushima, Keiichi

Yokohama Juvenile Classification Office

In order to classify psychologically the delinquent juveniles, it is in general necessary to find a